北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

大学生の性感染症に対する意識と性教育について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2009-09-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 齋藤, 和佳子, 芝木, 美沙子, 笹嶋, 由美
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005822

北海道教育大学紀要（教育科学編）第60巻　第１号　　平成21年８月
Journal of Hokkaido University of Education (Education) Vol. 60, No.1　　August, 2009

大学生の性感染症に対する意識と性教育について

齋藤和佳子・芝木美沙子・笹嶋　由美

北海道教育大学旭川校　臨床医科学・看護学教室

A Study on the Awareness of Sexually Transmitted Diseases and Sex Education among University Students

SAITO Wakako, SHIBAKI Misako and SASAJIMA Yumi

Department of Clinical Science and Nursing, Asahikawa Campus Hokkaido University of Education

要　旨

現在，性に関する情報や産業が氾濫し，児童生徒を取り巻く環境は大きく変化していることが考えられる。そこで，将来，教師を目指す者が多い教員養成系の学生を対象に，これまでの性教育が反映されているかに着目し，性感染症に関する今後の課題を把握するとともに，今後の性教育のあり方を検討することを目的とした。

北海道内のＡ大学の学生を対象に，性感染症の意識・知識と学校での性教育に対しての意識・意欲について質問紙調査を実施した。有効回収数382部，回収率48.4％であった。

大学生の性感染症に対する意識や知識，学校での性教育に対しての意識・意欲には性別や所属課程による差がみられた。そして，性感染症に関する確かな知識を身につけるためには，早期からの教育だけが重要なのではなく，その後の継続的な教育によってより一層の効果があらわれることがわかった。

Ⅰ．はじめに

近年，10代の性意識・性行動は開放的・早期化傾向にあり，高校３年生の性交経験率は男子26.6％，女子30.0％に達している[1)]。その背景には，児童生徒の体格の向上により性的な成熟が早まっていることに加え，性に関する情報や産業が氾濫し，児童生徒等を取り巻く環境は大きく変化していることが考えられる。このような状況の中で，偏った知識や情報からの性行為が増え，10代の性感染症の増加が問題となっている。後天性免疫不全症候群（AIDS）は，平成16年に報告数が1,000件（HIV感染者を含む）を超え，中でも20代の患者は25.0％を占めている[2)]。そして，その他の性感染症についても，若年者の性器クラミジア感染症の増加が懸念され，平成16年の性器クラミジア感染症の報告数38,155件のうち，20代が50.8％，10代が13.7％を占めている[2)]。また，わが国ではHIV感染例の増加の傾向と性器クラミジア感染症罹患率上昇とほぼ並行しており，その裏では性感染症予防に有効であるコンドームの出荷数が減少をたどっているという報告もなされてい

る[3)]。

そこで本研究では，将来，教師を目指す者が多い教員養成系の学生を対象に，近年，増加傾向にある性感染症の意識・知識と学校での性教育に対しての意識・意欲の調査を行い，これまでの性教育が反映されているかに着目し，性感染症に関する今後の課題を把握するとともに，今後の性教育のあり方を検討することを目的とした。

Ⅱ．研究対象および方法

2006年10月13日～11月10日に，北海道内のＡ大学の学校教育教員養成課程と養護教諭養成課程に所属する学生789名を対象としてアンケート調査を実施した。調査方法は無記名自己記述式の質問用紙を学内のゼミ（83）にゼミ単位で配布し，プライバシー保護のため，記入後封筒に入れて回収した。

調査内容は，①性行動について，②性教育について，③性感染症の知識について，④性教育に対する考え方などである。

調査結果の解析は，χ^2検定（５以下のセルがある場合はYatesの補正値を，セルに０がある場合はFisher法を用いた），ｔ検定を行い，有意水準５％をもって差があるとした。なお，集計および統計解析にはMicrosoft ExcelおよびExcelアンケート太閤Ver.3.0を使用した。

Ⅲ．結　果

１．調査対象の概要

回収数は391部，有効回答数は382部（男性143名，女性238名，不明１名）であり，回収率は48.4%であった。性別でみると，男性37.4%（143名），女性62.3%（238名）であった。学年別内訳は，１年生37.7%（144名：男性72名，女性72名），２年生23.0%（88名：男性23名，女性65名），３年生23.0%（88名：男性27名，女性61名），４年生14.9%（57名：男性19名，女性38名），無回答1.3%（５名：男性２名，女性２名，無回答１名）であった。

系別でみると，保健や体育など健康に関わることを学んでいる系に所属する学生は14.9%（57名）（以下健康系とする），そうでない系に所属する学生は51.3%（196名）（以下その他の系とする），不明129名であった。

２．性感染症について

性感染症が気になるかについて，「非常に気になる」14.9%（57名），「気になる」64.7%（247名），「気にならない」17.3%（66名），「全く気にならない」2.1%（８名）であった。そして，「非常に気になる」「気になる」と答えた者を『気になる方』，「気にならない」「全く気にならない」と答えた者を『気にならない方』としたところ，『気になる方』79.6%（304名），『気にならない方』19.4%（74名）であった。

性別でみると，『気になる方』では男性72.7%（104名）に対し，女性84.0%（200名）と，女性が有意に多かった（Ｐ＜0.005）。系別では，その他の系76.0%（149名）に対し，健康系91.2%（52名）と健康系の方が有意に多かった。学年別では有意差はなかった。

性感染症に対して恐怖心はあるかについて，「非常に感じる」28.0%（107名），「感じる」56.3%（215名），「ほとんど感じない」13.4%（51名），「感じない」1.6%（６名）であった。そして，「非常に感じる」「感じる」と答えた者を『恐怖心を感じる方』，「ほとんど感じない」「感じない」と答えた者を『恐怖心を感じない方』としたところ，『恐怖心を感じる方』84.3%（322名），『恐怖心を感じない方』14.9%（57名）であった。

性別でみると，『恐怖心を感じる方』では男性75.5%（108名）に対し，女性89.9%（214名）と，女性が有意に多かった（Ｐ＜0.005）。学年別では，３・４年生78.6%（114名）に対し，１・２年生88.4%（205名）と１・２年生が有意に多かった（Ｐ＜0.05）。系別で有意差はなかった。

3．学校での性教育

1）エイズ教育について

学校でエイズ教育を受けた経験の有無について，「ある」は98.2%（375名），「ない」は1.8%（7名）であった。性別，系別，学年別でみたが，有意差はなかった。

学校でエイズ教育を受けた経験があると答えた375名に，エイズ教育を受けた場所を聞いたところ，最も多かったのは「高校」89.3%（335名）で，次いで「中学校」84.3%（316名），「大学」60.5%（227名），「小学校」33.9%（127名）であった。

エイズ教育を受けた機会を聞いたところ，最も多かったのは「保健の授業」89.3%（335名）で，次いで「学校行事」57.3%（215名），「保健以外の授業」5.6%（21名），「保健室」1.6%（6名），「その他」2.7%（10名）であった。「保健以外の授業」では，「性教育学」「家庭科」「総合的な学習の時間」があげられていた。また，「その他」の内容は「学校以外の場所で行われた講演会」「保健だより」などがあげられていた。学年別でみると，「学校行事」では1・2年生52.8%（122名）に対し，3・4年生64.3%（90名），「保健以外の授業」では1・2年生3.0%（7名）に対し，3・4年生9.3%（13名）と3・4年生が有意に多かった（共にP＜0.05）。

エイズに関して学んだ内容を聞いたところ，最も多かったのは「エイズの感染経路」87.7%（329名）で，次いで「エイズの予防方法」84.5%（317名），「エイズの症状」81.3%（305名），「エイズの現状」78.7%（295名），「エイズ患者への理解」65.1%（244名），「疾病概念」58.4%（219名），「検査」34.9%（131名），「治療法」32.3%（121名），「その他」0.8%（3名）であった。「その他」としては「胎児への影響」などがあげられていた。

2）性感染症について

学校で受けた性感染症に関する教育の経験の有無について，「ある」は88.0%（336名），「ない」は11.8%（45名）であった。

性別でみると，「ある」は男性81.8%（117名）に対し，女性916%（218名）と女性が有意に多かった（P＜0.005）。系別では，「ある」は健康系98.2%（56名）に対し，その他の系86.7%（170名）と健康系が有意に多かった（P＜0.05）。学年別で有意差はなかった。

性感染症に関する教育を受けた経験があると答えた者336名に，性感染症に関する教育を受けた機会を聞いたところ，最も多かったのは「保健の授業」80.7%（271名）で，次いで，「学校行事」51.8%（174名），「保健以外の授業」6.0%（20名），「その他」2.7%（9名）であった。「保健以外の授業」では，「性教育学」「家庭科」「総合的な学習の時間」があげられていた。また，「その他」の内容は「学校以外の場所で行われた講演会」「保健だより」「小冊子」などがあげられていた。学年別でみると，「保健以外の授業」では1・2年生3.0%（6名）に対し，3・4年生9.9%（13名）と3・4年生が有意に多かった（P＜0.05）。

4．エイズ・性感染症に対する関心

関心のあるエイズ・性感染症に対する情報において，最も多かったのは「エイズの症状・治療法」51.0%（195名）で，次いで「性感染症の症状・治療法」50.3%（192名），「エイズの予防法」41.6%（159名）などであった（表1）。

性別でみると，「特にない」は男性が有意に多かった（P＜0.05）。系別でみると，「エイズの検査・治療場所」「性感染症の症状・治療法」は健康系が有意に多く（P＜0.05，P＜0.005），「特にない」はその他の系が有意に多かった（P＜0.05）。学年別でみると，「性感染症の症状・治療法」「性感染症の流行状況」は3・4年生が有意に多かった（P＜0.05，P＜0.01）。

5．性知識や性行動への影響について

性知識や性行動への影響を与えていると思うものを聞いたところ，最も多かったのは「友達・先輩」57.9%（221名）で，次いで「雑誌」51.6%（197名），「TV」50.3%（192名）などであった（表2）。

性別でみると，「友達・先輩」（P＜0.05），「ビ

表１　エイズ・性感染症に対する関心

名（%）

	全体 n＝382	性別 男 n＝143	性別 女 n＝238	性別 検定	系別 健康系 n＝57	系別 その他 n＝196	系別 検定	学年別 1・2年 n＝232	学年別 3・4年 n＝145	学年別 検定
エイズの症状・治療法	195 (51.0)	76 (53.1)	119 (50.0)	n.s.	37 (64.9)	97 (49.5)	＊	120 (51.7)	72 (49.7)	n.s.
性感染症の症状・治療法	192 (50.3)	70 (49.0)	122 (51.3)	n.s.	41 (71.9)	93 (47.4)	＊＊＊	105 (45.3)	85 (58.6)	＊
エイズの予防方法	159 (41.6)	58 (40.6)	101 (42.4)	n.s.	30 (52.6)	78 (39.8)	n.s.	94 (40.5)	61 (42.1)	n.s.
性感染症の予防方法	135 (35.3)	45 (31.5)	90 (37.8)	n.s.	24 (42.1)	64 (32.7)	n.s.	81 (34.9)	51 (35.2)	n.s.
エイズの検査・治療の場所	133 (34.8)	54 (37.8)	79 (33.2)	n.s.	27 (47.4)	60 (30.6)	＊	76 (32.8)	54 (37.2)	n.s.
性感染症の検査・治療の場所	129 (33.8)	50 (35.0)	79 (33.2)	n.s.	23 (40.4)	61 (31.1)	n.s.	71 (30.6)	55 (37.9)	n.s.
エイズの流行状況	119 (31.2)	48 (33.6)	71 (29.8)	n.s.	23 (40.4)	60 (30.6)	n.s.	68 (29.3)	49 (33.8)	n.s.
性感染症の流行状況	100 (26.2)	31 (21.7)	69 (29.0)	n.s.	21 (36.8)	52 (26.5)	n.s.	49 (21.1)	49 (33.8)	＊＊
その他	2 (0.5)	2 (1.4)	0	n.s.	0	1 (0.5)	n.s.	1 (0.4)	1 (0.7)	n.s.
特にない	44 (11.5)	23 (16.1)	20 (8.4)	＊	1 (1.8)	26 (13.3)	＊＊	30 (12.9)	13 (9.0)	n.s.

（n.s.非有意，＊p＜0.05，＊＊p＜0.01，＊＊＊p＜0.005）

デオ・ＤＶＤ」「ポルノ雑誌」「インターネット」（共にＰ＜0.005）は男性が有意に多かった。系別にみると，「授業」「専門書」は健康系が有意に多かった（Ｐ＜0.005，Ｐ＜0.05）。学年別に見ると，「恋人」は３・４年生が有意に多かった（Ｐ＜0.05）。

６．エイズ・性感染症に関する知識

エイズ・性感染症に関する問題で，正答率が最も高かったものは「健康に見えても，HIV に感染していることがある（○）」96.6%（369名）であり，正答率が50%以下だったものは「現在，日本では性感染症の中で最も患者数が多いのは性器クラミジア感染症である（○）」25.9%（99名），「性感染症に罹患すると，HIV に感染しやすくなる（○）」31.7%（121名）であった（表３）。

性別でみると，「HIV は母子感染する可能性がある（○）」は女性が有意に高かった（Ｐ＜0.05）。

系別で見ると，「HIV は性行為による感染が多い（○）」「現在，日本では性感染症の中で最も患者数が多いのは性器クラミジア感染症である（○）」（共にＰ＜0.005），「HIV は母子感染する可能性がある（○）」「コンドームで性感染症を予防できる（○）」（共にＰ＜0.05）は有意に健康系が高かった。

学年別にみると，「HIV ／ AIDS の検査は，保健所で無料・匿名で受けることができる（○）」「現在，日本では性感染症の中で最も患者数が多いのは性器クラミジア感染症である（○）」（共にＰ＜0.05）は有意に３・４年生が高かった。

エイズ・性感染症に関する知識の正答数をみると，正答数の平均は全体7.1個であった。

性別でみると，男性6.8個に対し，女性7.2個と女性が有意に高かった（Ｐ＜0.05）。系別でみると，健康系8.2個に対し，その他の系6.8個と健康系が有意に高かった（Ｐ＜0.01）。学年別でみたが有意差はなかった。

表2　性意識・性行動に影響を与えているもの

名（%）

	全体 n＝382	性別 男 n＝143	性別 女 n＝238	性別 検定	系別 健康系 n＝57	系別 その他 n＝196	系別 検定	学年別 1・2年 n＝232	学年別 3・4年 n＝145	学年別 検定
友達・先輩	221 (57.9)	94 (65.7)	127 (53.4)	＊	29 (50.9)	116 (59.2)	n.s.	139 (59.9)	78 (53.8)	n.s.
雑誌	197 (51.6)	77 (53.8)	120 (50.4)	n.s.	32 (56.1)	103 (52.6)	n.s.	119 (51.3)	76 (52.4)	n.s.
TV	192 (50.3)	64 (44.8)	128 (53.8)	n.s.	30 (52.6)	101 (51.5)	n.s.	115 (49.6)	75 (51.7)	n.s.
ビデオ・DVD	161 (42.1)	97 (67.8)	63 (26.5)	＊＊＊	17 (29.8)	84 (42.9)	n.s.	102 (44.0)	57 (39.3)	n.s.
恋人	128 (33.5)	37 (25.9)	91 (38.2)	＊	25 (43.9)	62 (31.6)	n.s.	67 (28.9)	58 (40.0)	＊
漫画	102 (26.7)	37 (25.9)	65 (27.3)	n.s.	13 (22.8)	50 (25.5)	n.s.	68 (29.3)	33 (22.8)	n.s.
インターネット	97 (25.4)	57 (39.9)	40 (16.8)	＊＊＊	16 (28.1)	50 (25.5)	n.s.	58 (25.0)	37 (25.5)	n.s.
ポルノ雑誌	87 (22.8)	54 (37.8)	33 (13.9)	＊＊＊	10 (17.5)	43 (21.9)	n.s.	57 (24.6)	29 (20.0)	n.s.
授業	74 (19.4)	23 (16.1)	51 (21.4)	n.s.	24 (42.1)	31 (15.8)	＊＊＊	38 (16.4)	34 (23.4)	n.s.
専門書	24 (6.3)	10 (7.0)	14 (5.9)	n.s.	9 (15.8)	12 (6.1)	＊	11 (4.7)	10 (6.9)	n.s.
親	24 (6.3)	6 (4.2)	18 (7.6)	n.s.	2 (3.5)	13 (6.6)	n.s.	12 (5.2)	11 (7.6)	n.s.
新聞	15 (3.9)	7 (4.9)	8 (3.4)	n.s.	4 (7.0)	8 (4.1)	n.s.	5 (2.2)	9 (6.2)	n.s.
兄弟姉妹	13 (3.4)	7 (4.9)	6 (2.5)	n.s.	1 (1.8)	8 (4.1)	n.s.	7 (3.0)	6 (4.1)	n.s.
先生	12 (3.1)	7 (4.9)	5 (2.1)	n.s.	1 (1.8)	7 (3.6)	n.s.	5 (2.2)	7 (4.8)	n.s.
その他	3 (0.8)	2 (1.4)	1 (0.4)	n.s.	0	3 (1.5)	n.s.	5 (2.2)	3 (2.1)	n.s.

（n.s.非有意，＊p＜0.05，＊＊p＜0.01，＊＊＊p＜0.005）

大学でエイズ教育を受けた経験の有無でみると，受けたことのある者7.3個に対し，ない者6.8個と大学エイズ教育を受けたことのある者が有意に高かった（P＜0.05）。

大学で性感染症に関する教育を受けた経験の有無でみると，受けた経験のある者7.4個に対し，ない者6.8個と大学で性感染症に関する教育を受けた経験のある者が有意に高かった（P＜0.01）。

エイズ教育，性感染症に関する教育を受けた経験の有無，小学校でのエイズ教育，性感染症に関する教育を受けた経験の有無で正答数をみたが，有意差はなかった。

7．性教育に対する考え方

1）集団での性教育の必要性

学校における集団での性教育の必要性について聞いたところ，「必要である」94.0%（359名），「必要でない」4.2%（16名）であった。性別，系別，学年別で有意差はなかった。

学校における集団での性教育が必要でないと答

表３　エイズ・性感染症に関する知識（正解者の割合）

名（%）

	全体 n＝382	性別			系別			学年別		
		男 n＝143	女 n＝238	検定	健康系 n＝57	その他 n＝196	検定	1・2年 n＝232	3・4年 n＝145	検定
健康に見えてもHIV感染していることがある（○）	369 (96.6)	139 (97.2)	229 (96.2)	n.s.	56 (98.2)	189 (96.4)	n.s.	224 (96.6)	140 (96.6)	n.s.
日本のHIV感染者は増加している（○）	337 (88.2)	130 (90.9)	206 (86.6)	n.s.	53 (93.0)	168 (85.7)	n.s.	206 (88.8)	127 (87.6)	n.s.
HIV性行為による感染が多い（○）	332 (86.9)	126 (88.1)	205 (86.1)	n.s.	56 (98.2)	159 (81.1)	＊＊＊	204 (87.9)	124 (85.5)	n.s.
HIV母子感染する可能性がある（○）	308 (80.6)	108 (75.5)	200 (84.0)	＊	53 (93.0)	148 (75.5)	＊	192 (82.8)	112 (77.2)	n.s.
コンドームで性感染症を予防できる（○）	294 (77.0)	111 (77.6)	183 (76.9)	n.s.	50 (87.7)	142 (72.4)	＊	178 (76.7)	112 (77.2)	n.s.
オーラルセックスで性感染症に感染する（○）	286 (74.9)	107 (74.8)	179 (75.2)	n.s.	48 (84.2)	154 (78.6)	n.s.	167 (72.0)	115 (79.3)	n.s.
HIV/AIDSの検査は、保健所で無料・匿名（○）	282 (73.8)	101 (70.6)	180 (75.6)	n.s.	43 (75.4)	132 (67.3)	n.s.	182 (78.4)	97 (66.9)	＊
性感染症は感染すると必ず症状がでる（×）	246 (64.4)	84 (58.7)	162 (68.1)	n.s.	43 (75.4)	124 (63.3)	n.s.	149 (64.2)	94 (64.8)	n.s.
性感染症罹患するとHIVに感染しやすくなる（○）	121 (31.7)	38 (26.6)	82 (34.5)	n.s.	24 (42.1)	54 (27.6)	n.s.	76 (32.8)	42 (29.0)	n.s.
最も患者数が多いのは性器クラミジア感染症（○）	99 (25.9)	30 (21.0)	69 (29.0)	n.s.	29 (50.9)	44 (22.4)	＊＊＊	50 (21.6)	46 (31.7)	＊

（n.s.非有意，＊p＜0.05，＊＊p＜0.01，＊＊＊p＜0.005）

えた16名にその理由を聞いたところ，最も多かったのは「学校でやらなくてよいから」７名，次いで「必要に応じて個人の指導のみでよいから」６名，「逆効果になるから」４名，「子どもたちに理解させるのは難しい」２名，「その他」２名で，「みんな具体的にどのようなものか分かっていない」という意見があった。

学校における集団での性教育が必要であると答えた359名に，学校における集団での性教育が必要である理由を聞いたところ，最も多かったのは「正しい知識・情報を与えるため」93.3%（335名）で，次いで「性に関する問題を阻止するため」63.0%（226名），「正しい選択をする力を養うため」44.8%（161名）などであった。その他の内容では，「ケーススタディができる」「個人指導だけでは相手を責める感じになってしまう」「人として大切なことだから」「自分を大切にするため」「必要であると考えるが，逆効果になる心配はある」という意見があった（表４）。

性別でみると，「性に関する問題を阻止するため」は男性が有意に多く（Ｐ＜0.05），「他人や自己理解のため」は女性が有意に多かった（Ｐ＜0.05）。系別でみると，「正しい知識・情報を与えるため」はその他の系が有意に多く（Ｐ＜0.05），「正しい選択をする力を養うため」は健康系が有意に多かった（Ｐ＜0.05）。学年別でみると「正しい選択をする力を養うため」「心身の健康と健全な生活態度を確立するため」（共にＰ＜0.005），「心身の成長が早まっているから」「みんなで学べるから」（共にＰ＜0.05）は３・４年生が有意に多かった。

２）集団での性教育の時期（表５）

以下の性教育の内容を「小学校低学年」「小学校中学年」「小学校高学年」「中学校」「高校」「教えなくてよい」のどの時期に指導するのが適切と

表 4　学校における集団での性教育が必要と考える理由

名（%）

	全体 n＝359	性別			系別			学年別		
		男 n＝132	女 n＝226	検定	健康系 n＝56	その他 n＝186	検定	1・2年 n＝216	3・4年 n＝138	検定
正しい知識・情報を与える	335 (93.3)	125 (94.7)	209 (92.5)	n.s.	48 (85.7)	179 (96.2)	＊＊	199 (92.1)	132 (95.7)	n.s.
性に関する問題の阻止	226 (63.0)	92 (69.7)	133 (58.8)	＊	37 (66.1)	120 (64.5)	n.s.	131 (60.6)	91 (65.9)	n.s.
正しい選択をする力を養う	161 (44.8)	47 (35.6)	114 (50.4)	＊＊	36 (64.3)	88 (47.3)	＊	80 (37.0)	77 (55.8)	＊＊＊
他人や自己理解	139 (38.7)	52 (39.4)	87 (38.5)	n.s.	26 (46.4)	76 (40.9)	n.s.	77 (35.6)	59 (42.8)	n.s.
心身の健康と健全な生活態度を確立	132 (36.8)	44 (33.3)	88 (38.9)	n.s.	28 (50.0)	66 (35.5)	n.s.	66 (30.6)	64 (46.4)	＊＊＊
心身の成長が早まっている	116 (32.3)	43 (32.6)	73 (32.3)	n.s.	20 (35.7)	70 (37.6)	n.s.	60 (27.8)	54 (39.1)	＊
性を自然なものと捉えさせる	76 (21.2)	30 (22.7)	46 (20.4)	n.s.	12 (21.4)	44 (23.7)	n.s.	41 (19.0)	34 (24.6)	n.s.
みんなで学べる	25 (7.0)	9 (6.8)	16 (7.1)	n.s.	6 (10.7)	12 (6.5)	n.s.	10 (4.6)	15 (10.9)	＊
その他	9 (2.5)	4 (3.0)	5 (2.2)	n.s.	3 (5.4)	4 (2.2)	n.s.	4 (1.9)	5 (3.6)	n.s.

（n.s.非有意，＊p＜0.05，＊＊p＜0.01，＊＊＊p＜0.005）

表 5　指導に適切な時期（n＝359）

名（%）

	指導する場合の適切な時期							指導しなくてよい
	小学校から指導				中学校以降での指導			
	小学低	小学中	小学高	計	中学校	高　校	計	
性器のつくりと働き	35 (9.7)	111 (30.9)	142 (39.6)	288 (80.2)	58 (16.2)	3 (0.8)	61 (17.0)	0
二次性徴	9 (2.5)	124 (34.5)	152 (42.3)	285 (79.4)	61 (17.0)	0	61 (17.0)	3 (0.8)
初経・月経	15 (4.2)	148 (41.2)	138 (38.4)	301 (83.8)	44 (12.3)	1 (0.3)	45 (12.5)	1 (0.3)
精通・射精	14 (3.9)	116 (32.3)	161 (44.8)	291 (81.1)	51 (14.2)	3 (0.8)	54 (15.0)	1 (0.3)
性交・受精	7 (1.9)	43 (12.0)	144 (40.1)	194 (54.0)	141 (39.3)	8 (2.2)	149 (41.5)	0
妊娠・出産	16 (4.5)	49 (13.6)	132 (36.8)	197 (54.9)	139 (38.7)	7 (1.9)	146 (40.7)	0
避妊の方法	4 (1.1)	25 (7.0)	101 (28.1)	130 (36.2)	195 (54.3)	18 (5.0)	213 (59.3)	0
人工妊娠中絶	4 (1.1)	16 (4.5)	77 (21.4)	97 (27.0)	201 (56.0)	43 (12.0)	244 (68.0)	2 (0.6)
性感染症	4 (1.1)	22 (6.1)	94 (26.2)	120 (33.4)	195 (54.3)	31 (8.6)	226 (63.0)	0
エイズ	8 (2.2)	29 (8.1)	115 (32.0)	152 (42.3)	173 (48.2)	19 (5.3)	192 (53.5)	0

考えるか聞いた。そして，「小学校低学年」「小学校中学年」「小学校高学年」と答えた者を『小学校からの指導』,「中学校」「高校」と答えた者を『中学校以降での指導』とした。

⑴　性器のつくりと働き，二次性徴，初経・月経，精通・射精

性器のつくりと働きでは，「小学校高学年」39.6%（142名）が最も多く，性別でみると，『小学校からの指導』では男性69.7%（92名）に対し，女性86.7%（196名）と女性が有意に多かった（P＜0.005）。学年別でみると，『小学校からの指導』では１・２年生75.5%（163名）に対し，３・４年生87.7%（121名）と３・４年生が有意に多かった（P＜0.01）。系別では有意差はなかった。

二次性徴では，「小学校高学年」42.3%（152名）が最も多く，性別でみると，『小学校からの指導』では男性63.6%（84名）に対し，女性88.9%（201名）と女性が有意に多かった（P＜0.005）。系別でみると，『小学校からの指導』では健康系94.6%（53名）に対し，その他の系80.1%（149名）と健康系が有意に多かった（P＜0.01）。学年別でみると，『小学校からの指導』では１・２年生74.5%（161名）に対し，３・４年生87.0%（120名）と３・４年生が有意に多かった（P＜0.01）。

初経・月経では，「小学校中学年」41.2%（148名）が最も多く，性別でみると，『小学校からの指導』では男性68.9%（91名）に対し，女性では92.5%（209名）と女性が有意に多かった（P＜0.005）。系別でみると，『小学校からの指導』では健康系96.4%（54名）に対し，その他の系84.4%（157名）と健康系が有意に多かった（P＜0.05）。学年別でみると，『小学校からの指導』では１・２年生78.7%（170名）に対し，３・４年生91.3%（126名）と３・４年生が有意に多かった（P＜0.005）。

精通・射精では，「小学校高学年」44.8%（161名）が最も多く，性別でみると，『小学校からの指導』では男性65.2%（86名）に対し，女性では90.3%（204名）と女性が有意に多かった（P＜0.005）。系別でみると，『小学校からの指導』では健康系96.4%（54名）に対し，その他の系81.7%（152名）と健康系が有意に多かった（P＜0.05）。学年別でみると，『小学校からの指導』では１・２年生75.5%（163名）に対し，３・４年生89.1%（123名）と３・４年生が有意に多かった（P＜0.005）。

⑵　性交・受精，妊娠・出産，避妊の方法，人工妊娠中絶

性交・受精では，「小学校高学年」40.1%（144名）が最も多く，性別でみると，『小学校からの指導』では男性40.9%（54名）に対し，女性61.9%（140名）と女性が有意に多かった（P＜0.005）。系別でみると，『小学校からの指導』では健康系73.2%（41名）に対し，その他の系53.8%（100名）と健康系が有意に多かった（P＜0.05）。学年別で有意差はなかった。

妊娠・出産では，「中学校」38.7%（139名）が最も多く，性別でみると，『小学校からの指導』では男性41.7%（55名）に対し，女性62.8%（142名）と女性が有意に多かった（P＜0.005）。系別でみると，『小学校からの指導』では健康系80.4%（45名）に対し，その他の系53.2%（99名）と健康系が有意に多かった（P＜0.005）。学年別でみると，『小学校からの指導』では１・２年生50.0%（108名）に対し，３・４年生62.3%（86名）と３・４年生が有意に多かった（P＜0.01）。

避妊の方法では，「中学校」54.3%（195名）が最も多く，性別，系別，学年別でみても有意差はなかった。

人工妊娠中絶では，「中学校」56.0%（201名）が最も多く，性別，系別，学年別でみても有意差はなかった。

⑶　性感染症（エイズを除く），エイズ

性感染症では，「中学校」54.3%（195名）が最も多く，性別，系別，学年別でみても有意差はなかった。小学校でエイズ教育経験の有無でみると，『小学校からの指導』では小学校でエイズ教育を受けた経験のある者では44.1%（52名）に対し，小学校でエイズ教育を受けた経験のない者では28.2%（68名）と小学校でエイズ教育を受けた経

験のある者が有意に多かった（P＜0.005）。

大学でのエイズ教育経験の有無，小学校での性感染症に関する教育経験の有無，大学での性感染症に関する教育経験の有無でみたが有意差はなかった。

エイズでは，「中学校」48.2%（173名）が最も多く，性別，系別，学年別でみても有意差はなかった。

3）学校で性教育を行うときの協力者

もし学校で性教育を行うとなると誰に協力を求めるか聞いたところ最も多かったのは「養護教諭」67.7%（243名）であり，「産婦人科医」37.0%（133名），「保健体育科の教師」34.5%（124名），「学級担任」19.2%（69名），「保健師」18.4%（66名），「学校医」16.2%（58名），「協力を求めない」0.8%（3名），「その他」1.1%（4名）であった。

8．教師としての性教育に関する指導の意識

教師として性教育を指導することに対して，どのような意識を持っているか聞いたところ，「ぜひ指導したい」1.3%（5名），「指導してもよい」76.7%（293名），「あまり指導したくない」16.2%（62名），「指導したくない」1.3%（5名）であった。そして，「ぜひ指導したい」「指導してもよい」と答えている者を『指導したい方』，「あまり指導したくない」「指導したくない」と答えた者を『指導したくない方』としてところ，『指導したい方』78.0%（298名），『指導したくない方』17.5%（67名）であった。

系別でみると，『指導したい方』では健康系93.0%（53名）に対し，その他の系76.5%（150名）と健康系が有意に多かった（P＜0.05）。性別，学年別で有意差はなかった。

教師として性教育を指導することに対しては，「ぜひ指導したい」「指導してもよい」と答えた298名に指導してみたい内容を聞いたところ，最も多かったのは「妊娠・出産」47.0%（140名）で，次いで「避妊の方法」42.6%（127名），「エイズ」42.3%（126名），「男女の相互理解」39.6%（118名），「人工妊娠中絶」36.6%（109名），「性感染症（エイズを除く）」36.2%（108名），「初経・月経」35.2%（105名），「性被害の防止」33.2%（99名），「二次性徴」32.9%（98名），「性交・受精」31.2%（93名），「精通・射精」28.2%（84名），「性情報への対処」24.5%（73名），「家族の役割」23.8%（71名），「性器のつくりと働き」21.1%（63名），「家庭・学校・社会での性役割」21.1%（63名），「性的な欲求とその調節」16.4%（49名）などであった。

Ⅳ．考　察

1．性感染症に対する意識について

性感染症が気になるか聞いたところ，約8割の者が『気になる方』であった。『気になる方』は男性72.7%に対し，女性84.0%と女性が有意に高く，健康系もその他の系と比べると有意に多かった。これは，健康系には養護教諭養成課程の女子学生が多く含まれていることから興味・関心が高いことも関係していると考えられる。性感染症に対する恐怖心において『恐怖心を感じる方』では男性75.5%に対し，女性89.9%と女性が有意に高く，エイズ・性感染症に対する関心においても「特にない」では男性が有意に多かった。また，小林ら[4]が2002年に高校1年生を対象とした調査でも性感染症への関心において「非常に気になる」「少し気になる」で女性が有意に高く，性感染症に対する恐怖感でも「非常に感じる」「感じる」では女性が有意に高いことから，男性は女性に比べ性感染症への関心が低く，恐怖心も薄い傾向があり，今後の課題として性感染症への関心を高め，危機感があることを認識させる必要があると考える。

2．学校での性教育

1）学校で受けたエイズ教育

学校でエイズ教育を受けた経験の有無について，「ある」は98.2%でありほぼ全員がエイズ教育を受けていることがわかった。エイズ教育の機会において「学校行事」「保健以外の授業」「その

他」で３・４年生が有意に多かった。そして，「学校行事」では大学でエイズ教育を受けた経験のある者が有意に多かったことから，大学の講義である「性教育学」や学校内で行われた講演会，健康系の学生ではゼミナール活動や学校外で行われた講演会への参加等が影響したためと考えられる。エイズ教育において保健の授業が大きな役割を担っていることは明らかだが，その他にも「家庭科」「総合的な学習の時間」「保健だより」という意見もあり，一部ではあるが保健以外の授業でも積極的にエイズ教育が取り入れられていることがわかった。エイズに関して学んだ内容を聞いたところ,「エイズの感染経路」「エイズの予防方法」「エイズの症状」という順に多かった。「エイズの疾病概念」が約６割であったが，授業等において疾病概念を教えずに進めるのは考えにくく，疾病概念という言葉の理解が難しく，「エイズの症状」と混同している者もいると考えられる。また，エイズは平成16年に報告数が1,000件を超え，中でも20代の患者が25.0%を占めている[2]現状では「エイズの感染経路」「エイズの予防方法」に留まらず，正しい知識を持ち，思いやりをもってエイズ患者を温かく支援するためにも「エイズ患者への理解」についてもしっかりと学ぶ必要がある。

２）学校で受けた性感染症に関する教育

学校で受けた性感染症に関する教育の経験の有無について，「ある」は88.0%であった。2000年に笹原ら[5]が大学生を対象とした調査では66.9%でありこれと比べると有意に多かった。健康系はその他の系より有意に多かったが，これは専門科目やゼミナール活動，学校外で行われた講演会に積極的に参加したためと考えられる。性感染症に関する教育の機会においては「保健以外の授業」で３・４年生が有意に多かった。そして，「学校行事」では大学で性感染症に関する教育を受けた経験のある者が有意に多かったことから，エイズ教育と同様に大学の講義である「性教育学」や学校内での講演会，健康系の学生ではゼミナール活動等が影響したためと考えられる。エイズ教育同様に性感染症に関する教育においても保健の授業が大きな役割を担っていることは明らかだが，その他にも「家庭科」「総合的な学習の時間」「保健だより」という意見もあり，一部ではあるが保健以外の授業でも積極的に性感染症に関する教育が取り入れられていることがわかった。また，「小冊子」という意見もあり，学生にとって手に取りやすく，性感染症について知るきっかけとして小冊子を有効に活用することが望まれる。

３．エイズ・性感染症に対する関心

関心のあるエイズ・性感染症に対する情報において最も多かったのは,「エイズの症状・治療法」と「性感染症の症状・治療法」であり，それぞれ半数を超え,「エイズの予防法」「性感染症の予防法」が続いたことから，主に症状や治療法，予防法で関心が高いことがわかった。また，エイズに関して学んだ内容において,「エイズの予防方法」「エイズの症状」と答えた者が８割以上いたことから，以前に学んだ経験があるが再度学び直したいという意欲がうかがえる。性別でみると「特にない」で男性が有意に高く，エイズ・性感染症に関する知識の正答数において女性が有意に高かったことから男性は女性に比べ関心が薄く，十分な知識が身についていないことが危惧される。エイズや性感染症は自分だけでなく相手にも感染させる可能性があることや予防ができることをしっかりと認識し，自分やパートナーの健康を守ることを理解し，行動することが望まれる。系別にみると,「特にない」では健康系に対し，その他の系が有意に多かった。これは，健康系は今まで受けてきた教育や健康に対して興味・関心が高いこと，今後教員として子どもたちに性教育を教える立場であることを自覚し，教養を高めようとする態度が影響したためと考えられる。しかし，エイズや性感染症について学んだ機会において「総合的な学習の時間」「家庭科」や「学校行事」などの特別活動があげられていることも考えると，性教育の実施者は保健体育科の教師や養護教諭だけでなく全教員が担うものであるので，教員養成課

程においては性教育について積極的に学べる環境を整え，子どもたちに性に関する科学的知識を与えるとともに，生命の大切さについても伝える教員としての指導力を育成することを期待する。また，性感染症に関する教育を受けた経験別にみると，「特にない」と答えた者は約3割であり，性感染症に関する教育を受けた経験のない者が有意に多かった。このことは，学んだ経験がないことが後の興味・関心にも影響することを示唆し，正しい知識を学ばず性交を経験している恐れもあることから早期からの教育が重要であると考える。

4．性知識や性行動への影響について

性知識や性行動への影響を与えていると思うものを聞いたところ，最も多かったのは「友達・先輩」「雑誌」「TV」「ビデオ・DVD」という順に多かった。2002年に筆者ら[6]が本大学で行った調査では「TV・ビデオ」「雑誌」「友達・先輩」という順に多く，本調査では「TV」と「ビデオ・DVD」というように項目は分けたもののほぼ同様の結果であり，依然としてマス・メディアの果たしている役割は大きいことがわかった。性別でみると，「ビデオ・DVD」「ポルノ雑誌」「インターネット」で男女の差が大きかった。その背景として，内容的に男性の関心をひくものが多く，書店やコンビニエンスストア，レンタルビデオ店等での入手のしやすさや個人のみで膨大な量の情報を自由に閲覧できることがうかがえる。男性の身近には多くの性の情報源があるが，中には興味本位に性の快楽性を強調しているものもあり，正しい知識を身につけているとは言い難く，エイズ・性感染症に対する関心において「特にない」と答えた者も多かったことから，多くの情報から正しい情報を選択することが重要であることを認識し，正しい知識を持ち，行動に生かす必要がある。また，「授業」は系別では健康系が，性感染症に関する教育の経験別では教育を受けた経験がある者が有意に多かったことから，学校における教育活動が大きな影響を与えていることが示された。

5．エイズ・性感染症に関する問題

エイズ・性感染症に関する問題では，エイズに関するものが正答率80%以上と高かったが，「現在，日本では性感染症の中で最も患者数が多いのは性器クラミジア感染症である（○）」25.9%，「性感染症に罹患すると，HIVに感染しやすくなる（○）」31.7%と低かった。2001年に武富ら[7]が医学部の新入生を対象として新入生健康診断時に行った調査では，問題の正答率は「健康に見えても，HIVに感染していることがある」97.3%，「近年，日本のHIV感染者は増加している」90.6%，「近年，日本のHIV感染経路は性行為によるものが多い」72.5%，「性感染症に罹患すると，HIVに感染しやすくなる」22.8%，「性感染症は感染すると必ず症状がでる」10.7%であった。この正答率と比較すると，本調査と同様にやはりエイズより性感染症に関する問題で正答率が下がっている傾向があり，特に性感染症に関する教育においては疾病概念を主とした知識注入の学習だけでなく，具体的な内容も取り入れ行動変容につながることが望まれる。

エイズ・性感染症に関する知識の正答数の平均は7.1個であった。性別でみると，男性6.8個に対し，女性7.2個と女性が有意に高かった。女性は，妊娠や出産を担う者として命に関わる性の問題に高い関心があり，正しい知識を得ようとしていると思われる。系別にみると，健康系が有意に高かったことから今まで受けてきた教育や興味・関心が影響したことや今後教師として子どもたちに指導する立場として専門性を身につけるための努力をしていることがうかがえる。大学でエイズ教育を受けた経験の有無でみると，エイズ・性感染症に関する知識の正答数の平均は大学でエイズ教育を受けたことのある者が有意に高く，大学でのエイズ教育は知識を身につけるには大いに有効であることがわかった。大学で性感染症に関する教育を受けた経験の有無でみると，エイズ・性感染症に関する知識の正答数の平均は大学で性感染症に関する教育を受けた経験がある者が有意に高かった。また，小学校でのエイズ教育の経験の有無や

小学校での性感染症に関する教育の経験の有無では有意差がみられなかったことから，確かな知識を身につけるためには早期からの教育だけが重要なのではなく，その後の継続的な教育が必要だと考える。

6．学校における集団での性教育の指導について

1）学校における集団での性教育の必要性

学校における集団での性教育の必要性について聞いたところ,「必要である」94.0%であった。1999年に天野ら[8]が教員養成課程3年に在学する教育実習終了後の学生に行った調査では「小学校での性教育は必要」と答えた者は92.6%であった。本調査では，指導内容による指導に適切な時期を調査したかったため校種を特定せずに質問し，天野ら[8]の調査では小学校と特定されているが結果はほぼ同様の結果であった。

学校における集団での性教育が必要でないと答えた者にその理由を聞いたところ,「学校でやらなくてよいから」「必要に応じて個人の指導のみでよいから」「逆効果になるから」という順に多かった。「学校でやらなくてよいから」という意見は性教育そのものを行わなくてよいという意味ではなく，学校以外の場所，例えば家庭で行うべきとの思いと考えられる。また,「必要に応じて個人の指導のみでよいから」という意見が多かったことから，性に関する問題はプライベートなことであり，個人差も大きいことから集団での性教育ではなく一人ひとりに合わせた対応で十分であるという考えがうかがえる。天野ら[8]の調査では「時期が早い」「学校でやらなくてよい」「理解できない」という順に多かったが,「学校でやらなくてよいから」以外は小学校において多くみられる問題である。

学校における集団での性教育が必要であると答えた者にその理由を聞いたところ,「正しい知識・情報を与えるため」「性に関する問題を阻止するため」「正しい選択をする力を養うため」という順に多かった。このことは，性情報が氾濫し，性交の経験率や10代の性感染症の感染者や人工妊娠中絶が増加している時代の中で，学校の教育活動の中で，他の人との関わりを大切にする態度を育て，性に関する正しい知識を与え，真剣に性について考えさせ，主体的に行動選択できる力を育むことが必要であるという考えがうかがえる。また，その他の内容では,「必要であると考えるが，逆効果になる心配はある」という意見があげられ，場合によっては性に対して開放的な意識や恐怖心を植えつけてしまう可能性が危惧されていた。小林らは[4]，学校における性教育を進めるにあたり，「学校側には，保護者に自分の子どもがどのような性感染症の教育を受けているのか把握してもらうために，PTA総会や保健便り等を利用して情報を提供するなど，保護者と学校側との連携を推進していくための努力が求められる。」と述べている。このように学校が様々な工夫をすることで，保護者と意見交流を行うなどして共通理解を深め，連携して子どもたちの発達段階に応じた指導をすることは不可欠であると考える。そして，子どもたちが性に関して興味本位な姿勢にならぬよう教師側が真剣に取り組んでいかなければならないと考える。

学年別でみると,「心身の成長が早まっているから」「心身の健康と健全な生活態度を確立するため」「みんなで学べるから」「正しい選択をする力を養うため」で3・4年生が有意に高かったことから，教育実習等で実際に子どもたちとふれあい,「教師」という立場で教壇に立つことで子どもたちに身につけさせたい力や集団で学ぶことの素晴らしさを実感したと考える。系別でみると,「正しい選択をする力を養うため」では健康系が有意に高く,「正しい知識・情報を与えるため」ではその他の系が有意に高かった。また，性教育の指導の意識で『指導したいと思う方』では健康系が有意に高かったことから，健康系では専門科目の学習や意欲によって，性教育を指導するという自覚がしっかりあり，正しい知識を与えるだけでなく，その後の行動変容につながる指導が重要であると考えていることがうかがえる。

2）指導の時期

(1)「性器のつくりと働き」「二次性徴」「初経・月経」「精通・射精」

性別でみると，『小学校からの指導』はどの項目においても女性が有意に高く，学年別でみると，『小学校からの指導』はどの項目においても3・4年生が有意に多かった。また，系別でみると，「性器のつくりと働き」以外の項目において『小学校からの指導』は健康系が有意に高く，男性より女性が，1・2年生より3・4年生が，その他の系より健康系において早期からの指導が適切であると考えている傾向があった。「二次性徴」において，小学校中学年までに教えるのが適切と考えている者は，3・4年生では約45%，健康系では約70%であったことから，平成14年度実施の小学校学習指導要領～体育編で児童の発育・発達の早期化に対応するために，今まで小学校高学年で指導していた「思春期の体の変化」を小学校中学年から教えることとした[9]大きな変化に対応した考えである。教育実習で実際に現場に出て児童と接して中学年での指導の必要性を感じたことと，大学で学んだ専門科目が影響したためと考える。「初経・月経」において，男性では「中学校」と答えている者が25.0%であり，中学校においては多くの生徒がすでに初経を迎えていることを考えると，二次性徴によっておこる身体的な変化には男女差があることを理解する必要があると考える。また，小学校中学年までに教えるのが適切と考えている者は健康系が7割と多かったが，これは健康系には養護教諭養成課程の学生が含まれているため，月経指導を行う時期として早期に初経を迎える子どもにも対応できる「小学校中学年」が適切ではないかと考えていることが影響したためと考える。「精通・射精」において，男性では「中学校」と答えている者が約3割に対し，女性では『小学校からの指導』が望ましいと考える者が多かった。このことは，女性の方が男性よりも早期に二次性徴が訪れる傾向にあり，自分の経験が影響したためと考えられる。「初経・月経」と同様に二次性徴によっておこる身体的な変化には男女差があることを理解する必要がある。

(2)「性交・受精」「妊娠・出産」「避妊の方法」「人工妊娠中絶」

「性交・受精」「妊娠・出産」において，性別でみると，『小学校からの指導』は女性が有意に多かったことから，男女の意識に大きな差があり，男性より女性の方が早期に指導が必要であると考えてた。このことは，妊娠・出産を担う女性として生命の誕生について早くから学ぶ必要があると考えていることがうかがえる。平成14年度実施の中学校学習指導要領～保健体育編では中学校1年生で「生殖にかかわる機能の成熟」において受精・妊娠までを取り扱うこととし，妊娠の経過は取り扱わないものとしている[10]ことから，特に早期からの指導には大きな配慮が必要であり，興味本位な内容にならぬよう，生命の誕生の尊さを心に響かせられる指導であることが望まれる。

「避妊の方法」において，「中学校」が半数以上と最も多く，「小学校高学年」「小学校中学年」と続いた。平成14年度実施の中学校学習指導要領～保健体育では中学校3年生でコンドーム使用の有効性[10]について触れているが，これはエイズ及び性感染症の予防のためである。平成15年度実施の高等学校学習指導要領～保健体育編では，家族計画の意義において避妊の方法について[11]触れている。しかし，2005年に行われた第6回「青少年の性行動全国調査」[1]において性交経験率は中学生では男子3.6%，女子4.2%であり，高校生では男子26.6%，女子30.3%であったことや2002年に筆者ら[6]が大学生を対象として行った調査においては，初交年齢が15歳以下の者は9.5%であったことから，高校からの指導では子どもたちの実態に対応できないと思われる。

「人工妊娠中絶」において，「中学校」と答えた者が半数以上と最も多かった。妊娠・出産，避妊の方法と合わせて指導することが有効ではないかという考えがうかがえる。10代の性交経験率や人工妊娠中絶の増加を背景に考えると，人工妊娠中絶についても「中学校」での指導は決して早いとは言い切れないと感じた。避妊や人工妊娠中絶

には,性交に対する価値観が大きく影響するので,パートナーとの信頼関係の構築や生命尊重の態度についてもしっかりとふれていくことが重要であると考える。

⑶　「性感染症（エイズを除く）」「エイズ」

「性感染症（エイズを除く）」と「エイズ」ともに「中学校」と答えた者が半数以上と最も多く,「小学校高学年」と合わせると８割以上であった。若年者のクラミジア等の性感染症の増加を背景に，性交経験率が上昇する高校以前に予防教育を行う必要性がうかがわれた。エイズについては,小学校６年生で学ぶ⑶病気の予防イ．病原体がもとになって起こる病気の予防において[12]，エイズを取り扱っている教科書もある。エイズは感染症ということだけでなく，人権問題も関わり，健康系はその他の系より早期からの指導が必要であると考えていた。

３）学校で性教育を行うときの協力者

学校で性教育を行うとなると誰に協力を求めるか聞いたところ,最も多かったのは「養護教諭」「産婦人科医」「保健体育科の教師」という順に多かった。田代[13]は,「養護教諭は，学校での性教育の計画立案に積極的に関わる立場にあります。また,学級活動，保健学習に対し資料整備，情報提供を行ったり専門的分野においてはチームティーチングによる指導も行っています。」と述べている。このように養護教諭は，性教育に大いに関わり,専門性を生かして，保健室での活動を通じて得られた子どもたちの性に関する情報を集団での性教育や個別指導に反映させることが期待されていることがうかがえる。また，近年，健康相談活動（ヘルスカウンセリング）が重視され，性にかかわる問題を心と体の両面から解決することや早期から子どもの変化に気づき，性の問題行動を防止する役割も担っていると考える。

「産婦人科医」と答えた者が４割程度,「保健師」と答えた者が２割程度であったことから，外部の専門機関と積極的に連携したいという意欲がうかがえた。しかし，平岡[14]は,「現実には思春期教育にかかわっている産婦人科医はごく少数である。この原因としては，教育関係者が性教育に保健・医療関係者の関与に理解を示していないことと，産婦人科医の側でも思春期分野は特殊な分野という傾向がある点が挙げられる。」としている。このことから，学校では10代の性感染症の罹患や人工妊娠中絶等の問題について危機感を持ち，医療・保健従事者との連携が有効であることを検討し，今後より連携を深め解決に向けての努力をしなければならないと考える。

７．教師としての性教育に関する指導の意識

１）性教育に関する指導の意識

教師として性教育を指導することに対して,「指導してもよい」と答えた者が８割いたが,「ぜひ指導したい」と答えた者は２％未満であり，２割程度の者が「あまり指導したくない」と答えていた。集団での性教育は必要であると考えている者がほとんどであるが，実際に自分が指導することに対しては不安感や消極的な部分がみられた。また，系別にみると,「指導したいと思う方」は健康系が有意に多かったため，その他の系の学生は性教育というのは保健体育科の教師や養護教諭が主に行うべきであるという意識がある者もいるように感じた。天野ら[8]は,「性教育を行う者の“性教育”への意識を高めるためには，養成段階である大学における性教育のカリキュラムの配分や内容を検討する必要性もあることが示唆された」と述べているが，大変重要なことである。性に関する問題はプライバシーに関わることであり，子どもたちは性に対する多様な意識や価値観をもっているためにその指導は容易ではない。しかし，教員養成課程においては性教育について積極的に学べる環境を整え，子どもたちに性に関する科学的知識を与えるだけでなく，自尊心や周りの人たちを思いやる心を育て，生命の大切さについてもしっかりと伝えられる教師としての指導力を育成することを期待したい。そして，学校現場においては，校内で積極的に性教育の指導方法等について研修を行い，保護者とも意見を交換するなどし

て，教職員が共通理解を図るとともに校外での性教育に関する研究会に参加することで不安感を取り除く努力が必要と考える。

2）指導してみたい内容

教師として性教育を指導することに対して,「ぜひ指導したい」「指導してもよい」と答えた298名に指導してみたい内容を聞いたところ,「妊娠・出産」「避妊の方法」「エイズ」「男女の相互理解」「人工妊娠中絶」という順に多かった。「妊娠・出産」「避妊の方法」が多かったことから性交経験率の上昇や10代の人工妊娠中絶の増加が懸念されている現状において,生命誕生の経過を理解し,自他の生命を尊重する態度が重要視されていると感じた。また,「男女の相互理解」では男女では物事に対する感じ方や行動様式が違い，自分の考えを押し付けてしまっては相手の人格を傷つけることにもなりかねない。学校という集団の中で，男女の身体的，心理的な違いを理解し，お互いを思いやる心を育てることは，特定の異性と人間関係を築く上でも大変重要であると考える。

Ⅴ．まとめ

以上のことから，大学生の性感染症に対する意識や知識，学校での性教育に対しての意識・意欲には性別や所属する系による差があった。そして，性感染症に関する確かな知識を身につけるためには，早期からの教育だけが重要なのではなく，その後の継続的な教育によってより一層の効果があらわれると考えられた。そのため，幼少期からの系統的な性教育を行うことで，豊かな人間関係や異性との信頼関係を築き，生涯にわたって主体的に性に関する問題を解決し，幸福な人生を送ることに繋がっていくことが期待される。

また，教師として，性教育を行うことへの意識を高めるために，教員養成課程においては，カリキュラムの配分や内容を検討し，性教育について積極的に学べる環境を整える必要があることが示唆された。

人間の性は人格から切り離すことはできず，男女の生き方やあり方に深くかかわることから，性教育は子どもの人格形成に大きな意義を持っているといえる。そして，性教育を通じて，子どもたちに確立した性意識を持ち，望ましい性行動をとる力を身につけさせるには，自己肯定感や将来に希望を持ち，自分を大切にできることや相手のことを思いやる共生意識を育むことが基本にあると考える。

これから，教師として子どもたちと接する教員養成大学の学生が果たすべき役割は，性教育は子どもの人格の形成に大きく関わることを自覚し，子どもたちと真剣に向き合うことで自己の人間性を高め，性教育に関する指導力を身につけるべく自己研鑽することである。

稿を終えるにあたり，お忙しい中調査にご協力くださいました北海道内のＡ大学の学生の皆様に心より感謝申し上げます。

Ⅵ．文　献

1）原純輔,片瀬一男：第６回「青少年の性行動全国調査」（2005年）の概要，現代性教育研究月報，24：1-6，2006
2）国立感染症研究所感染症情報センター： http://idsc.nih.go.jp/index-j.html
3）熊本悦明：わが国の HIV ／性感染症の現状－ HIV 感染症がかつての梅毒と同様の新しい全身的な重篤性感染症であることを認識せよ－，産婦人科治療，90：530-539，2005
4）小林亜由美，川合桃子，齋藤美保他：思春期の性感染症に関する知識・意識・行動の現状と予防教育のあり方，群馬パース学園短期大学紀要，５：49-58，2003
5）笹原理会，岩本玲奈，徳永明子他：大学生の性感染症に関する意識と知識の現状－性教育改革の必要性－，ペリネイタル・ケア，20：730-735，2001
6）齋藤和佳子，中野朋美，芝木美沙子他：大学生の性意識と性行動の実態調査，北海道教育大学紀要（教育科学編），56：47-61，2006
7）武富弥栄子，尾崎岩太，山田茂人他：大学生保護者の HIV ／ STD に関する意識調査，日本エイズ学会誌，７：76-81，2005
8）天野敦子，市古雪江，野谷昌子他：小学校における性教育についての教員養成課程学生の意識に関する一考察，愛知教育大学研究報告（教育科学編），50：33-39，

2001
9）文部科学省：小学校学習指導要領解説　体育編，3，61-64，1999
10）文部科学省：中学校学習指導要領（平成10年12月）解説―保健体育編―，102-105，1999
11）文部科学省：高等学校学習指導要領解説　保健体育編，14，85-86，2004
12）前掲書9）87-88
13）田代恵子：養護教諭の立場から考える性教育，助産雑誌，58：312-317，2004
14）平岡友良：高校生の性および性教育に関する意識調査，思春期学，21：192-199，2003

（齋藤和佳子　元旭川校大学院生）
（芝木美沙子　旭川校教授）
（笹嶋　由美　旭川校教授）